「油中サイクル」とキャリア教育で、学力とともに協働性や課題意識を育む

宮崎県　日南市立油津中学校

生徒の基礎学力の定着や積極性などに課題が見られた日南市立油津中学校では、2014年度から「分かる授業」を目指して、授業と家庭学習を連動させた学習サイクルの確立や、良好な人間関係づくりに基づく学び合い活動に力を入れてきた。2017年度はさらに、そこで出た課題を踏まえて、生徒が自ら「問い」を持って主体的に課題を追究するキャリア教育を進め、その成果を教科学習に生かそうとしている。

◎1947（昭和22）年開校。太平洋に面した油津港や再生した油津商店街に隣接する。学校経営目標は「今日が楽しく明日が待たれる学校」。

校長　山元俊朗先生
生徒数　181人
学級数　8学級（うち特別支援学級2）
電話　0987-23-1149
URL　https://cms.miyazaki-c.ed.jp/4202/htdocs/

校長
山元俊朗
やまもと・としろう
中学校国語科教諭、教頭を経て、現職。

教頭
三樹浩二
みつぎ・こうじ
中学校社会科教諭、主幹教諭を経て、現職。

授業づくりの工夫

「分かる授業」を目指して各教科で学習の流れを統一

生徒の学力に課題のあった日南市立油津中学校では、2014年度に宮崎県「宮崎の子どもの学力を伸ばす総合推進事業」の指定校となったのをきっかけに、基礎学力と思考力・判断力・表現力のバランスのよい育成を目指した授業改善に着手した。

その柱は、**「油中サイクル」**に基づく授業づくりだ（**図**）。山元俊朗校長は次のように説明する。

「どの生徒にも『分かる授業』の実現を目指して、板書や掲示方法など、必ず取り組むべき方法を決め、全教科で授業の流れを統一しました」

特に重視したのは、その日の授業の「問い」と「答え」を明確にすることだ。授業で何をすればよいか生徒に見通しを持たせるため、授業の冒頭に学習課題を示し、最後には、授業で分かったことを生徒代表に発表させるとともに、各自にも自分の言葉でまとめさせ、教員がそれを確認するようにした。分かったことがまとめにくい場合は、「アシストボード」でヒントを提示している。

また、思考力・判断力・表現力の育成を目指し、学び合い活動の型を「意見交換型」「共同作業型」など5つに整理した上で、各教科で積極的に取り入れていった。

「話し合いをしても、生徒たちが良好な関係でなければ、考えは深まりません。そこで、以前から生徒指導の一環として推進してきた**ピア・サポートやNCP（日南コミュニケーションスキルプログラム）**を、学び合い活動を進めるための人間関係づくりに生かすことにしました」（山元校長）

具体的には、年間5時間、学活の時間を使って、上手な話し方・聞き方や頼み方・断り方など、円滑なコミュニケーションのためのスキルを学ぶ。ほかにも、「行ってみたい都道府県」などのテーマに合わせて自由に話す「シャベリカ」や、ある生徒が「1分間スピーチ」を行い、それを聞いた生徒が「ありがとうカード」を返すなどの活動を行っている。

家庭学習の指導では、教科ごとにその日の授業内容を振り返り、重要だと思うものを自分なりにまとめ直す**「がんばりノート」**（**図**）を導入した。三樹浩二教頭はこう説明する。

「教科書やノートを見返す過程で、学習内容の定着が図れると考えました。実際に取り組んでみると、エッセンスを要約する力も求められるため、思考力もかなり高まったと感じます」

授業づくりの成果と課題

学力が伸び、学校が落ち着く一方、いくつかの課題が残る

こうした取り組みを続けたところ、

家庭学習習慣や基礎学力の定着、学級づくりで一定の成果が見られた。例えば、文部科学省「全国学力・学習状況調査」では、「家で学校の授業の復習をしている」の肯定率がほぼ100％で、学力も学年を追うごとに伸びを見せている。

また、思いやりがあり、配慮のできる生徒が育ち、学校全体が非常に落ち着き、行事でもクラスでまとまって行動するなど、人間関係も良好だ。他方で、達成感や自己肯定感が低く、学習課題の設定方法にまで手が回らなかったことが課題として残った。

「自ら『問い』を立てると、生徒は意欲的に学びます。そして、それを自力で解決する経験を通して、達成感や自信につなげたいと考えました。そこで、課題を自分事として考えを深めていきやすいキャリア教育の充実を図ることにしました」（山元校長）

キャリア教育の実践と展望

自ら「問い」を立てることで思考力や表現力を育む

2016年度は教員の異動が多かったため、「油中サイクル」の定着を再度図り、2017年度に「総合的な学習の時間」を活用したキャリア教育に着手することにした。生徒に社会へ飛び込ませ、地域の人々との出会いを通じて価値観を広げさせるという活動で、全学年合同で取り組んでいる。

「地域には、輝いている人が大勢います。そうした身近な大人と出会った感動を、他者に伝えさせたいと考えました」（山元校長）

まず、生徒の中に「問い」を生み出すため、様々な活動を行った。

「問いを持つことの大切さや問いのつくり方を、生徒全員で学習しました。対比することで、当たり前だと思っているところにも実は問いがあることに気づかせました」（三樹教頭）

また、日南市長や油津商店街の再生を手がけた木藤亮太（きとうりょうた）氏を招いて、地域の現状と課題を語ってもらい、生徒に自分も地域の一員だという当事者意識を持たせた。

次に、全校生徒を縦割りで16班に分け、担当教員とともに班ごとに話し合い、そこで出た問いを基に、学びたいことや訪問先を検討していった。そして、各班で計画を立て、夏休みに企業などを訪問。例えば、山元校長が担当した班は、「なぜ市内に10社以上のＩＴ企業があるのか」という疑問から、そのうちの１社を訪ね、ＩＴ企業の仕事内容を詳しく学んだ。

また、三樹教頭が担当した班では、大学生が起業したゲストハウスを訪問し、「どうして大学生が起業できたの？」「資金は？」などの疑問を投げかけた。大学生からは「何となく過ごしてはだめ」「これからは語学力やコミュニケーション力が大切」などの熱いメッセージをもらい、生徒たちは触発された様子だったという。

その後、現役の新聞記者から指導を受けながら班ごとに本格的な壁新聞を作成。10月の文化発表会で集大成となるプレゼンを大勢の前で行う。

「これまで表現することに苦手意識を持つ生徒が多く見られましたが、今回の経験を糧に表現力が高まることを期待しています」（山元校長）

今回の活動では、生徒たちは想定以上に課題意識を持って取り組み、さらに、今回の追究を踏まえて次の問いを立てる生徒も見られたという。これまでの活動を通して、生徒の思考力の高まりも見られ始めている。

「今年度、初めてGPS-Academic*（以下、GPS）を受検したところ、思考力の高まりが可視化でき、本校の取り組みがうまく行っているという手応えを感じました」（山元校長）

定期考査の結果が振るわない生徒でもGPSの結果が良好だったケースもあり、生徒の潜在能力が可視化できたこともよかったという。

「GPSは、本当の思考力が分かる問題だと実感しました。結果は生徒に伝えて自信を持たせたり、指導に活用したりしています」（三樹教頭）

今年度の後半は、キャリア教育で培った問いを立てる視点を、授業づくりに生かしていく予定だ。

「生徒の疑問を学習課題と重ねることで、生徒がより主体的に取り組めるような授業づくりを考えていきたいと思います」（山元校長）

図 「油中サイクル」と「がんばりノート」

授業では、最初に「今日の授業は」として学習課題を提示し、最後に「分かったこと」として生徒に発表させた内容をまとめる。必要に応じてヒントとなるキーワードを提示する「アシストボード」も活用する。これらは各教室に常備。「油中サイクル」の図は、各教室前方の左上に必ず掲示し、普段から生徒の目につくように配慮している。

＊油津中学校提供資料を基に編集部で作成。

＊「GPS-Academic」については、P.9参照。